

目次

1. はしがき		i
研究組織 交付決定額 研究発表		
2. 概要		iv
3. 研究成果		
I. 問題		1
1. オリンピック報道と外国人イメージ		
2. これまでのオリンピック研究		
3. 外国人イメージとその構造		3
4. これまでの研究で残された問題		7
5. アテネ・オリンピック研究の目的		
6. 予備調査		9
II. オリンピック前後のパネル調査		12
1. 2004年学生パネル調査	1-1 方法	
1-2 結果		15
1-3 考察		22
2. 2004年市民パネル調査	2-1 方法	25
2-2 結果		26
2-3 考察		33
III. 翌年のパネル調査		35
1. 翌2005年学生パネル調査	1-1 方法	
1-2 結果		36
1-3 考察		40
2. 翌2005年市民パネル調査	2-1 方法	42
2-2 結果		43
2-3 考察		45
IV. 総合考察		46
文献		49
4. 付録		51

1. はしがき

本報告書は、平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「アテネ・オリンピック報道が日本人・外国人イメージに及ぼす影響」（16530398）の研究成果報告書である。本研究の遂行には、調査対象の学生の授業を担当されていた次の先生方に非常にお世話になった；東洋大学社会学部田中淳先生、東海大学文学部大山七穂先生、中央大学文学部安野智子先生、帝京大学文学部藤崎春代先生、武蔵大学社会学部山下玲子先生、昭和女子大学人間社会学部藤島喜嗣先生（所属は当時のもの）。心より感謝申し上げます。また、市民調査の回答者となっていたいただいた東京都小金井市の市民の皆様、調査実施に協力していただいた一橋大学社会心理学研究室の助手、院生、学生の皆様にも併せて感謝申し上げます。

研究組織

研究代表者	： 村田 光二	（一橋大学・大学院社会学研究科・教授）
研究分担者	： 稲葉 哲郎	（一橋大学・大学院社会学研究科・教授）
研究分担者	： 向田 久美子	（清泉女学院大学・人間学部・准教授）
研究分担者	： 佐久間 勲	（文教大学・情報学部・准教授）
研究協力者	： 樋口 収	（一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程）
研究協力者	： 高林 久美子	（一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程）

交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 16 年度	2,100,000	0	2,100,000
平成 17 年度	800,000	0	800,000
平成 18 年度	600,000	0	600,000
総計	3,500,000	0	3,500,000

研究発表

[平成 17 年度 学会発表]

- 村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・樋口収・高林久美子 （2005） アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(1)－愛国心、ナショナリズム尺度の検討－
日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集, 64-65. （2005 年 9 月 24 日口頭発表）
- 高林久美子・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・樋口収 （2005） アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(2)－学生調査の結果－ 日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集, 608-609. （2005 年 9 月 25 日 ポスター発表）

樋口収・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・高林久美子 (2005) アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(3)ー市民調査の結果ー 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 610-611. (2005年9月25日 ポスター発表)

向田久美子・村田光二・稲葉哲郎・佐久間勲・樋口収・高林久美子 (2005) アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(4)ー類似性認知の変化とメディア接触の影響ー 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 612-613. (2005年9月25日 ポスター発表)

佐久間勲・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・高林久美子・樋口収 (2005) アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(5)ー競技結果の原因帰属ー 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 614-615. (2005年9月25日 ポスター発表)

[平成18年度 学会発表]

Murata, K., Higuchi, O., & Takabayashi, K. (2006) *How did misconduct of a top athlete make a negative impression of his native people? An Athens Olympics study.* Poster presented at the 26th International Congress of Applied Psychology, Athens, Greece. (2006年7月19日)

Takabayashi, K., Murata, K., & Higuchi, O. (2006) *Changes in images of Japanese Students toward Greeks before and after Athens Olympics.* Poster presented at the 26th International Congress of Applied Psychology, Athens, Greece. (2006年7月19日)

Higuchi, O., Murata, K., & Takabayashi, K. (2006) *Increase in patriotism through the 2004 Athens Olympics: A Japanese study.* Poster presented at the 26th International Congress of Applied Psychology, Athens, Greece. (2006年7月19日)

村田光二・樋口収・高林久美子・佐久間勲・向田久美子・稲葉哲郎 (2006) アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(6)ー翌年度調査の報告ー 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 300-301. (2006年9月17日 ポスター発表)

村田光二 (2006) 「高い身体能力」は偏見の表明か?ー外国人イメージにおける知的能力次元と身体能力次元の関係の検討ー 日本心理学会第70回大会発表論文集, 75. (2006年11月3日 ポスター発表)

Murata, K. (2007) *Does "physically able" mean "intellectually incompetent"?* *Another dimension of ambivalent national stereotypes.* Poster presented at the 8th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Memphis, U.S.A., 321. (2007年1月27日)

[平成18年度 学術論文]

村田光二 (2006) 外国人イメージの構造ー調査データに基づく考察ー 森村敏己(編)『視覚表象と集合的記憶ー歴史・現在・戦争ー』旬報社 Pp.203-233. (11月15日)

1. 概要

本研究では、これまでのオリンピックと外国人イメージ研究の成果をふまえて、2004年のアテネ・オリンピック大会の前後にパネル調査を実施して、外国人イメージの変化とそれに影響する要因の検討を行った。

この研究の特色は、まず、外国人イメージを好感度と知的能力の2つの次元からとらえて測定を行い、各次元における変化を検討したことである。加えて、身体能力の次元についても探索的に検討した。次に、オリンピック大会では日本人意識の高揚が認められるが、それに関わる個人特性を愛国心とナショナリズムとに区別して測定して、それぞれがイメージ変化に及ぼす影響を検討したことである。素朴に国を愛する気持ちである愛国心と、他国と比べて自国を高く評価するナショナリズムについては尺度を開発して、個人差要因として測定した。方法上の特色としては、これまでの学生調査に加えて、一般市民からもランダムサンプリングを行って、代表性の高い対象者のデータを得たことである。また、翌2005年にも同等のパネル調査を学生と市民に実施して、比較対照とできるデータも得た。

主要な結果は次の通りである。学生調査では、開催国のギリシャ人のイメージは好感度では好転したが、知的能力では悪化したことが認められた。問題を起こした選手がいたハンガリー人のイメージは、いずれの次元でも悪化した。日本人自身のイメージはどちらの次元でもかなり改善された。市民調査では、これらの一部の結果だけが示され、外国人イメージが比較的安定して変化しにくい傾向が認められた。以上の結果は2005年調査では認められなかった。愛国心とナショナリズムがイメージ変化に影響することもあったが、予測とは一致せず、結果は安定しなかった。しかし、ナショナリズムはいくつかの外国人イメージに否定的影響を及ぼしている証拠が得られた。